

## ケース報告：タウンミーティングにおけるワールドワーク

パンクの若者、ビジネス関係者、警察、住民、麻薬依存症者、行政が一同に参加したスイス・チューリッヒにおけるオープンフォーラム

マックス・シュバック, Ph.D.

以下は、本ケース報告の理解を深めるために必要な理論と方法論を、重要と思われる部分のみがいつまんで説明したものである。各用語や概念の詳細については、序説 **Worldwork - ワールドワーク：組織、共同体、企業、公共の場における変容** を参照していただきたい。

ワールドワークのパラダイムでは、「集団や組織は異なるレベルで機能しており、それらのレベルはパラレル・ワールドである」と考えている。まず、「日常の現実のレベル」がある。このレベルは、組織に関する事実、組織内の人々、組織の構造、目標、戦略、解決が必要な諸問題などから成り立っている。もう一つは「自己組織化のレベル」である。このレベルにおいては、集団は自己組織化の原理、あるいは「場 (フィールド)」によって構造を与えられている。「場」には、集団内の異なる極や立場を配置する働きがある。自己組織化のレベルでは、いわゆる「問題」と呼ばれる事柄は、実はシステムがそれ自身の均衡を保とうとする試みと見なされる。このような自己均衡化の傾向の多くは場の分極性ということに関係している。場が分極化しているときには、一方の側のみ直接目に見える形で表れており、もう一方の側は集団内で非局在的な存在として浮遊する、ということが起きている。たとえば、ある集団のリーダーが「我々は恐れを知らない強い集団だ。何が起きようとも進んでいくぞ！」と発言したようなときに、この集団の分極性を感じ取ることができる。すなわち、この言葉の相手として暗

に想定されている疑り深い存在、「我々」のことを見込みがなく、前進したくないような存在と見なしてくる想像上の敵の存在を感じ取ることができるだろう。このようなときファシリテーターとしては、これらの各立場をより目に見えやすくするとともに、それらの相互作用を促進するために、そこからロール（役割）を作っていくとよい。これを、「非局在的な『集団の心と頭』ともいうべき、目に見えないディレクターによって監督されている一群の人々が、これから演劇を上演する」と考えると分かりやすいだろう。集団をリードしようとするときに、目に見えない手によって阻まれているような感じがするかもしれないが、そのようなとき実際は我々を別の方向に引っ張っている、この自己組織化の傾向の力を感じているのである。

ロールはさらに、「合意に基づいた現実のロール」と「ゴーストロール」に分けることができる。合意に基づいたロール（これは「CR（Consensus Reality）ロール」とも呼ばれるが、ここでは単に「ロール」という言葉で代用することもある）とは、文化や組織の中心的な信念の体系に属する立場であり、それゆえ、たいていはその集団によって受け入れられている立場である。そのため、この立場から発言しても、たいていは集団内から強い反応を誘発することはない。反対に、ゴーストロールとは、「特定の組織文化の中では『受け入れられない』『合理的ではない』、あるいはその集団が『現実』と見なすものの範疇外にあるため、私たちが声を与えることができないでいる振る舞い」を指す。ゴーストロールは明確に表現されてはいないものの、集団内の全員がその存在を感じ、そしてそれによって苦しめられている。ゴーストロールの存在は、意図しないコミュニケーションの中にも見つけることができる。

CRロールとゴーストロールは一緒になって影絵芝居を創り出しているようなものである。たとえば、人形芝居で二体の人形が会話を交わしているが、光が当たったスクリーンの後ろに三番目の人形の輪郭が映っているところを想像してほしい。スクリーンの手前の二体の人形は会話に没頭しているが、時々スクリーンの後ろの人形が一言さしはさむ。手前の人形たちはスクリーンの裏の影絵の人形に気づかずに、目の前の相手がその一言を言ったのだと信じているようだ。そうこうするうちに、この人形芝居では、手前の二体の人形たちが相手を誤解することが続き、おもしろいことになってくるだろう。これは観客にとってはおもしろ

いことだが、人形たちはおもしろいどころか、困って途方に暮れることになる。影の人形が見えずに途方に暮れている人形のレベルは、上記の日常現実のレベルに相当し、一方影の人形を含むレベルが自己組織化のレベル、あるいはプロセスワークで「夢のレベル」と呼んでいるものに相当する。ところで上記で「観客は楽しんでいるが人形たちは楽しんでいない」と述べたが、同じことがグループ・プロセスにも当てはまる。私たちがやりとりをするときに、一方の極あるいはロールにとらわれてしまうと辛いことがあるが、起きていることの構造を理解し、混乱の背後にあるゴーストロールに声を与えることができるなら、顔に微笑みさえ浮かんでくるかもしれないのだ。

このような力動は、実は私たちにとってすでになじみ深いものである。たとえば、私たちはよく「集団内で表面上話されていることとは裏腹に『実際に』起きていること」という言い方をすることがあるが、このようなとき、私たちはロールとゴーストロールの領域に足を踏み入れているのだ。「ロール」は、その組織文化で適切とみなされているコミュニケーション・スタイルで適切な内容や視点からものを話すが、ほのめかしや遠まわしな言い回し、ゴシップ、ある種の発言に対する反応の無さなどの中に、ゴーストロールのささやきを聞き取ることができる。

このような意図しない伝達内容をはっきりとさせたり、ゴーストロールに声を与えるなどしてレベルを変えることもできるが、集団がしばしばこのことを避けるのは、明るみに出てしまったことで收拾がつかなくなるのを恐れるからである。このことは合意に基づいた日常の現実の視点からはもったもなことである。私たちは、誰かが「真実」を言ってしまったばかりに、葛藤を引きずったり、関係性が永遠に壊れてしまうという状況に慣れているからである。一方、ワールドワークの視点からは、このことを別の角度から理解することができる。ロールとゴーストロールは、本当は集団全体、つまり集団内の全員に属している、という意味で、「非局在的」である。それゆえ、ゴーストロールを明るみにしていくということは、「あらゆる困難の元凶と見なしていた人、ロール、あるいは集団と自分は似たところがある」と気づくことでもある。また、集団の中で憎まれ役をとっていた人が組織を離れると、これらの役割やその役割の一部を今度は他の人が

取り始めることが多いのも同じ理由による。ゴーストロールの存在は、敵対する相手の集団の中に投影されやすいが、実は自分たちの集団の中にも存在している。しかし自分たちの集団内では、そのロールは周辺化されたままになりやすい。ここにご紹介するケース報告をお読みいただくと、二つのサブ・グループが互いに自分のグループの特徴の一部を相手に投影する様子がお分かりいただけることと思う。

このような力動があるために、相手に投影している役割、ロールが自分たちのグループにも存在するというを完全に理解するためには、しばしば感情的なやりとりが必要なのである。合理的、線形的なレベルのみでは、集団がそれ自身の本性に関する自覚を高めることは難しい。というのも、まさにそのレベルこそが、その集団が目覚めていく必要がある問題を周辺に追いやる信念の体系を含んでいることが多いからである。その意味では、唯一の解決とは、「私たちが、いかに他者であるか」「いかに自分たちを困らせることに自分自身が一部加担しているか」についての自覚を高めることであると言えよう。これは大変なことであり、私たちが直面化を避けたがるのも無理はない。

このような自覚を持つようになるまでの道のりには、多くの感情がつきまとう。どうしても、葛藤がエスカレートしたり、直面化したりする時期を通過する必要がある。そのようにしていく中で、自分の体験全体に丁寧に「自覚をもって」従うことができたときに初めて、これらのロールがシステム全体に存在することを受け入れられるようになるだろう。そうなった時、それらのロールの中に含まれている情報や知識全体が明らかになり、集団全体がそれを利用できるようになるのである。このような視点に立つと、障害や問題は利用されたくてうずうずしている潜在可能性であるとさえ言えるだろう。グループ・プロセスにおいては、「参加者が安心して参加できるような場づくりをすること」「プロセスの最後に葛藤が解決すること」「問題として提示された事柄が持つ新たな次元を参加者全員が理解できるようにすること」を助けるのがファシリテーターの仕事である。一方、プロセスの結果について懐疑的になったり心配したりするのは、参加者やクライアントの権利であるだけでなく、義務でさえある。これらの不安に気づいて対応し、参加者全員を守るのはファシリテーターの仕事である。

持続可能なファシリテーションを行うにあたっては、集団がそれ自体をファシリテートする傾向を見つけてそこを支えていくことが基本である。プロセス全体を促進させるようなロールは実はすべての集団に含まれているのだが、これらのロールにグループが気づきを向けたり表現したりすることはまれである。そのようなロールの一つの例が「長老」のロールである。長老とは、「相手に不快を与えないようなやり方で境界を保つことができると同時に、人生や人間とは常に成長し展開する神秘であることをとらわれない暖かさで理解しているため、すべての人や傾向に敬意を払い、それらを支えることができる」という資質を持つ存在のことである。その根幹には、人生の意味や、たましいや自然が演じる役割への絶対的信頼がある。これらの信頼は必ずしも目に見える形で現れないかもしれないが、心で感じ取ることができるようなものである。長老とは、この地球上で皆が共に生きることを可能にする中心的な価値観についての自分の信念を、自己の中心にしっかりと保ち続けることができる存在である。しかし、これらの信念を他人に押し付けたりすることはなく、むしろ他の人が心から従いたくなるように、自らの生き方でそれを示す。長老的な資質とは年齢には関係なく、集団のリーダーやファシリテーター以外の普通の人々がそれを体現することもしばしばである。

## **パンクの若者、ビジネスマン、警察、住民、麻薬依存症者、行政一同に参集したスイス・チューリッヒ市におけるオープンフォーラム**

### **背景：**

シュタドルホッフアプラッツ ( シュタドルホッフエン広場 ) はスイス、チューリッヒの中心にある人気のショッピング・エリアだ。広場は多くのレストランや店、人々でにぎわっており、夏にはレストランの外で、買い物客がベンチに座って足を休めたりする。広場の中央には噴水と花壇がある。近くには駅があり、この地域に多くの通勤者や通行人を運んでいる。

最近このシュタドルホッフプラッツはヨーロッパ中から流れてきたパンクの若者の主な溜まり場になっている。彼らは、ホームレス「アルキーズ」(アルコール依存症者を指す俗語)など、他のマージナルな集団と交わり飲酒したりする。また、広場には Polytoxicomania (ヘロイン、コカイン、アンフェタミンなど数種の向精神作用性の麻薬に依存する者を指すラテン語)の者たちも多くとむろしており、かなりワイルドなシーンが展開されたりする。また、これらのマージナル(非主流派)な集団のメンバーたちは、互いに時々衝突することもある。暴力沙汰に発展することもあるし、自分たちのポータブル・テープ・レコーダーを互いにポリウム一杯に鳴らしたりすることもある。また、パンクの若者たちがかなり攻撃的な調子で物乞いをするので、主流派の各集団に属する近くの住民や通行人から不満の声が出ている。彼らは攻撃的な物乞いのやり方や、怖い外見のパンクたち、そして彼らが飼っていて公園の中を自由にうろつく、飼い主と同じくらい怖い外見の大きな犬に、怖気づいていた。一方パンクたちのほうは、自分たちは通行人に色々な形で馬鹿にされている、と不満の声を漏らしている。

より広い文化的視点から見れば、チューリッヒは一晩で多文化になった市であるといえる。10年前には、多様性といえば主にギリシャ、スペイン、イタリア、トルコなど、近隣ヨーロッパ諸国のことに限られていたのに比べ、今では世界中の民族集団がチューリッヒの生活の一部になっている。スイスの多くの人々にとっては、この変化は困難なものであった。一方では、数えきれないほど多くの移民たちが、彼らの言うところの人種差別やスイス人の狭量さに苦しめられている。より寛容性を持ち、文化やサブ・カルチャーどうしの関係性を深めていこう、という意見もあれば、すべてを「規律正しく、スイスの伝統を守ったやり方」に保てるよう、政府や警察に要求する者もいる。

このようなことを背景に持つシュタドルホッフエンは、いつ爆発してもおかしくない状況である。規律を守らせるために市当局が警察を送り込んだこともあったが、このようなやり方は問題を内在している。ほとんどの場合、警察の仕事は裁判にかけられるような犯罪に関して、あるいは主流派の生き方を維持することに

興味を持ち、トラブルを抱えたくない人たちにとってはうまく機能する。しかしパンクなど非主流派の集団は、これらのどちらのカテゴリーにもぴったりと当てはまらない。たいていの場合、彼らはお金どころか、ほとんど何も所持していないので、軽度の罰金も払わない。彼らをその地域から撤去するのも長続きする解決にはならない。すぐに戻ってきてしまうからである。

### 市民集会:

このような今にも爆発しそうな場面を背景に、チューリッヒのSIP（トラブル・シューティングのために結成されたチューリッヒ市の社会福祉課の特別集団）のルーカス・ホーラーと私は、上記の問題を抱える様々な集団を援助するために、市民集会を計画した。ルーカスがすでに主な集団の代表たちを説得して、オープン・フォーラムという形で、思い切って自分たちが抱える困難な問題に公共の場で取り組もう、ということで話をつけていた。主な集団とは、地域の商店組合関係者、警察署長、行政当局、そしてパンクの若者たちである。オープン・フォーラムの2日前、ルーカスと私は事態の解決に関心を持つすべての集団と個別に会談し、彼らの立場や集会に対する危惧などを聞いてまわった。皆一様に良い結果が出ることにはかなり懐疑的であった。それにもかかわらず、当日私たちは、自分たちのネットワーキングの努力が実ったのを知ってうれしくなった。テナントの中には数百名の利害関係者たちが集まっていたのである。

集会には、警察署長と彼のアシスタント、多くの地元の商店関係者たち、行政評議会の7人の委員会メンバー、公園に住むホームレスの人たち、同じく公園に住む「アルキーズ」、パンクたちとその飼い犬、近くの高校に通う生徒たち、地域のアパートの住民、その他にも関心を寄せる人たちが数多く集まっていた。

まず最初に、パンク、警察、チューリッヒの中でも大規模な地元の高校に通う生徒（この学校の生徒は頻繁に広場に入出入りする）たちに、一人3分間、各立場から語ってもらった。まずここから以下のような様々な立場が出てきた：

ビジネス・オーナーたちの立場:非主流派のグループたちは商売にとって害悪だ。お客は怖がって広場に寄り付かなくなるし、収益も減ってしまった。ここで買い物しようとする人たちが虐待されるような目に合うのは間違っている。こんなに攻撃的に物乞いされるのも本当にいやだ。そのせいで従業員たちも怖がって仕事に来ることができないでいる。

警察の立場：皆我々のことを批判する。事業関係者たちは我々のやり方は手ぬるいと不満を言うかと思えば、非主流派集団の人たちは我々をファシスト呼ばわりする。マスコミは、何か事件が起これば、「警察は事態を統制できない」と言うくせに、介入すると「警察の残虐性」について書き立てる。

パンクたちの立場：皆自分たちのことを邪魔者扱いするし、見下している。自分たちは主流派とは違うライフスタイルや価値観を持っているのだ。自由社会なのだから自分たちの好きなように生きる権利があるはずだ。自分たちのことを攻撃的と思っているようだが、主流派たちが利益優先のライフスタイルを宣伝したり主張したりするやり方こそ、攻撃的でなくて何だ。

高校生の立場：皆お互いにもっと寛容になったらよいのと思う。年取った人たちは僕たち高校生のことを罵って色々と言ってくる。

最初のほうでパンクの女性のアシが話しはじめたところで、集会場に突然乗り込んできた別のパンクの若者が話をさえぎった。彼は、アシのことを裏切り者と罵り、彼女も含めてテント内にいるパンクの若者全員に向かって、他の人と同じ部屋で物事を解決しようとするのは反逆罪だ、と叫んだ。彼は「パンクは交渉はしないものなんだ！」と金切り声を上げ、出て行った。会場の皆はショックを受けてシーンとした。事業関係者の中にもアシが直面していた問題に仲間意識を感じる人がいたに違いない。というのも、彼らのグループの中にもフォーラムに反対する者が少なくなかったからだ。フォーラム反対者の言い分は、アルキーズやパンクたちに合法的立場を与えすぎることになるから、というものだった。これらの人たちは、フォーラムの実現を阻もうと、警察や議員に嘆願書を提出さえしていた。しかしチューリッヒ市は対話をすることを採決し、「昨今の状況では、一つの解決法はもはや長続きしない。むしろ多くの視点を考慮すべきである」とい



う市の方針をまとめた。というわけで、ここでは新たに「我々はお互いに共存することを学ぶ必要がある。共同体の皆が互いの違いについて取り組まない限り、法律的な要素のみに基づいた解決法では長続きしない」というチューリッヒ市の立場が出てきたことになる。

*分析:* ここにはあらゆるルールやゴーストルールが存在している。表面に一番近いのは、「相手側に話しかけることはしたくない。なぜならそれは自分の立場を捨てなければならないことを意味するから」というルールで、これは両方の側に存在する。一方チューリッヒ市は、最初からプロセス全体を抱えようとしているという意味で、「長老的な」ルールをとっている。

### **最初のやりとり:**

次に、物乞いについて、主流派と物乞い派の間で激しく論争が交わされた。主流派は、物乞いにノーと言うのがどんなに難しいかを訴え、物乞い側は十分なお金を手に入れるのがいかに大変であるかを訴えた。そのやりとりの合間に、ファシリテーターのルーカスが、両者とも共通点を持っていることを指摘した。つまり、両者とも、いかに生活をしていくのが難しいかを不満に思い、そのことについて相手の側を責める、という点で共通している、ということである。会場にいた全員が驚いたことに、両者ともこのことを理解し、認めた。事業関係者は高い賃貸料や諸経費について発言し、警察関係者は、常に批判され、孤独に任務を遂行するのがいかにつらいか、ということ語った。また、パンクたちは自分たちがいかに皆に嫌われ、見下されているかについて語った。

*分析:* ここで欠けているのは、すべての不満に耳を傾けることができるような、長老のルールである。ここにいるグループはすべて、「自分たちは利用されているだけで、自分が陥っている困難な状況に誰も耳を傾けてくれない」と感じていることで一致していた。この集會に集まることに関して否定的な空気があったのはこのせいである。つまり、どの立場の人も、自分の困難な状況に耳を傾けてもらうことに関して絶望的になっていたのだ。

話し合いが続く中で、驚くべき瞬間が数多く訪れたり、ロールの交替が自然に起きたりした。たとえば、商店関係者が「パンクたちがあたりかまわず小便するのが気に入らない」と発言すると、パンクの若者の何人かがこれを認めて謝罪した。そして、これからは自分たちの仲間がそのようなことをすることがないように、気をつけるつもりだ、と言った。パンクの一人が実際に立ち上がって、公園に仮設トイレを設置してくれたことに対して、市にお礼を言った(仲間のパンクの中には、そんなつまらないことをわざわざ言うなんて信じられない、という顔つきをする者もいたが)。しかし彼は次に、市がトイレを清潔に保たないことを批判して、「定期的にトイレ清掃をする人を雇ってください。多くのパンクは外で小便するほうが清潔だから、外でしようと思うのです」と付け加えた。これに対して私が「主流派に属していようと、非主流派集団に属していようと、スイス人はきれい好きということでは皆共通していますね」とコメントすると、皆これを理解し、会場は笑いで一つになった。

さらに色々な問題について話し合いが進むにつれ、両方の側のメンバーとも、一緒に話し合うことで気持ちが楽になるようだ、とコメントしあった。すると次に買い物客の一人がそこにいたパンクたちに、「今後自分たちの仲間が店のオーナーや従業員を困らせているところを見たら、介入しますか？」とたずねた。するとこれまで黙っていたパンクの一人が「僕はそうするつもりです。こうして一緒に話し合っ、お互いを人間として扱った結果、物の見方がすっかり変わりました」と答えた。商店関係者たちの何人かは、これを聞いて感動しているようだった。次にファシリテーターの助けを借りながらも、パンクたちが次のように問い返した。「もし僕たちが主流派の人たちに嫌がらせを受けているところを見たら、あなたたちも介入してくれますか？」ここで商店関係者たちはエッジにさしかかった。公共の場でイエスとは言いたくなかったのだ。彼らがためらうのを見て、パンクたちは明らかに傷ついたようだった。彼らはだんだんと激昂していき、そのうちの一人が、「おれたちだって元通りに、『おまえらなんかくそ食らえ』という態度に戻ってもいいんだ」と脅すように言った。そこで、私たちファシリテーターは、今は大事なことが起きている瞬間だ、とその場で起きていることを「フレーミング」(言葉で表現して枠組みを与えること)した。このような場合、両者とも、自分たちが相手の人生をととも困難なものにしてしまうようなパワー

を持っている、ということを理解することが重要である。これは両者とも、力を精一杯出して相手と出会うような瞬間だ。弱さや恐れからではなく、解決と、より良い関係性を心から欲することから真の和解は生まれる。

*分析：フレーミング* - ファシリテーターの私たちは両者が持つ強さとパワーについてフレーミングした。これは重要な瞬間である。ここでは相手から圧倒されたり操作されることを恐れて対話をするのを躊躇する、という形でエッジの始まりが表現された。真の対話は、相手の人生に大きな影響を与える力を自分は持っているということ、すべての立場の人たちが意識したときのみ可能になる。このようなとき、私たちは自分に自信を持った立場から相手と和解したいと思ひ、相手から自分のありのままの姿に敬意を払ってもらいたいと願う。このような立場に立って初めて、相手の立場に耳を傾け、相手と関わっていくことができるのである。

ファシリテーターがこの状況をフレーミングしたとき、状況が一変した。その地域でも大規模な店舗をいくつも経営している女性が前に出て、「私はそういうことを目撃したら介入して、パンクの若者たちを擁護します」と発言した。会場内はシーンと静まり返った。「本当にそうしてくれるんですか？」と一人のパンクの若者が明らかにこのやりとりに感動した様子で、信じがたいといった面持ちで聞いた。「ええ、本当にそうします」とその経営者は認めた。

*分析：* 主流派の攻撃者から自分が属する以外の集団を守る、と発言することによって、その人たちは地域共同体となる。彼らはもはや主流派の一部なのではない。なぜなら、今や彼らは以前とは変わって「私たちは皆で話し合う」という文化に属するようになったからだ。これは、相手に投影し続けることによって機能する主流派のあり方とは対極に位置する。この集会の後も継続した対話の基盤を創ったのはまさにこの瞬間だった。構造レベルでは、「他者」を襲う外部の存在、というのも、実はこの集団のゴーストロールである。この視点から見れば、両者とも相手を守ると約束したことは、グループ内で対話を将来的に続けていくことへのコミットメント、と解釈することができる。

この段階で、これまで発言しないでいた事業関係者の人が、「私たちは同じスペースを共有している者どうしなのだから、フォーラム参加者として『彼ら』という言い方をするのはやめて、『私たち』という言い方にしませんか」と提案した。この意見は会場全員の大きな拍手で迎えられた。今度はパンクの若者の一人が同じ方向で提案をした。私の覚えている限りでは、彼は次のように発言した。「この集会からは何も生まれないと皆思っていた。でも今ではお互いに態度が柔らかくなり、前よりずっと距離が縮まった。これは予想以上の出来だ。もしかしたら和解する 때가来たんじゃないかな。これから3ヶ月間皆ベストを尽くしてみて、うまく行ったかどうかを見てみればいい。もし一方がつい相手に何かをしでかしても、相手の側はそれを自分の差別感情を取り戻すいい訳にしないで、今晚のこの感情を思い出すべきだ。3ヶ月後にまた皆で集まって、どうなったかチェックしよう」

ファシリテーターの一人が、「今晚の感情を忘れていたような人がいたときに、その人に思い出させる努力をしようと思う人はどのくらいいますか？」と聞くと、たくさんの手が挙がった。

フォーラムは終わった。すべての立場の人がお互いの参加を感謝し合い、拍手を贈った。テントの中は、ほとんど祝祭のようなムードが満ちていた。以前は残虐さを非難されていた警察にも、参加したことに対して感謝の拍手が贈られた。会の途中で、社会活動家グループの一人が、警察のことをファシストと呼び、権力の乱用を非難する場面があった。それに対して警察署長は、「私たちはベストを尽くしていますが、いつも完璧であるわけではありません」と答えていた。そして、通勤者を暴行した者を逮捕しようとしたが、プロボクサーだったので警官たちがひどい殴られ方をした、という例を挙げて、警察の任務がときにはかなりハードなものになり得ることを付け加えた。そして参加していた分署長は二人とも、ファシスト呼ばわりされると傷つくことを認めた。パンクたちは徐々に静かになり、耳を傾け、そしてうなずいた。

おわりに:

すばらしいファシリテーションとチームワークをしてくれ、集会の間中楽しい気分を忘れなかったルーカスに心から感謝している。そしてS I P ( Security-Intervention-Prevention:チューリッヒ市のトラブルシューティング・チーム ) にも感謝の意を表したい。チューリッヒのマスコミはこのイベントのことを、「画期的な試み」と称えた。ルーカスは今でも、毎月一度、円卓会議を開くことを決定した今回のグループとの仕事を続けている。この会議は2003年夏から続いており、都市生活の新しいモデルを創り上げた。この会議はだれでも参加できるもので、警察、地域の行政関係者、商店組合関係者だけでなく、非主流派のグループからもたいてい少なくとも一人は参加者がある。シュタドルホッフエン広場の雰囲気や問題のレベルは、根本的に改善した。進歩的なチューリッヒ市の行政当局、特にこのプロジェクト全体を開かれた態度で支持して下さった行政評議委員のモニカ・ストッカー女史に感謝の意を表したい。

上記のオープン・フォーラムの雰囲気を味わっていただくために、以下にスナップ写真と新聞の切り抜きを掲載した。



あらゆるグループから参加者が集まったチューリッヒ市でのオープンフォーラム



アシとマックス。市民集会の後で。フォーラムで彼女はパンク派代表として雄弁に意見を述べるなど、中心的な存在として活躍した。



フォーラム開催の責任者であるSIPチームと、その飛び入りメンバーたち。地元のパブでフォーラム後の反省会を開いているところ。右から順に Bivoldzic Ibrahim、Gabriela Merlini dos Santos、Lukas Hohler、Michael Herzig、Christian Fischer、そして Max Schupbach)

raum der Band befindet, und verwendeten zwei Keyboards, mehrere Lautsprecherboxen, Mikrofone und eine Akustikgitarre. Die Stadtpolizei hofft nun auf hilfreiche Zeugenaussagen.

«Mode». In insgesamt zehn Fällen wurde Deliktsgut im Wert von über sechs Millionen Franken erbeutet. Die Stadt Zürich wurde in den vergange-

brungesucht. Polizeisprecherin Nicole Fix geht nicht davon aus, dass immer dieselbe Bande am Werk ist. «Diese Methode ist effektiv – deshalb wird sie angewandt.»



Gewerbevertreter und Punks gemeinsam in Konflikt-Zeit am Stadelhofen.

Marcus Felisch

### Gewerber und Punks verschafften sich Luft

ZÜRICH – Die Punkszene ist den Geschäftsinhabern am Stadelhoferplatz ein Dorn im Auge. Laut einigen Gewerbevertretern machen Kunden wegen der Punks einen Bogen

um den Platz. Um die Situation zu entschärfen, lud gestern die SIP (Sicherheit, Intervention, Prävention) des Sozialdepartements beide Parteien zu einem Forum ins extra dafür aufge-

baute Konflikt-Zeit auf dem Stadelhoferplatz ein. Rund 50 Personen, darunter knapp ein Dutzend Punks, verschafften sich Luft und machten Verbesserungsvorschläge.

B  
de

ZÜRICH  
frist  
betre  
tutor  
ungen  
gab  
geger  
schär  
Reto  
depar  
Minu  
hatte  
ment  
schie  
nen a

Se  
eig

ZÜRICH  
Migra  
hen  
gratio  
malrat  
hat d  
Plus»  
die S  
werk  
Seco  
des K  
sich d  
aus w  
entsp  
ten s  
Mittel

スイスの新聞「20 Minuten」に掲載された記事の切り抜き。